

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2009 年度 参加者レポート

日野原 慶 --- University of Scranton

中間レポート

忙しい。想像以上に忙しい。それが FLTA として働きはじめ、最初の一ヶ月間でもっとも強く感じたことでした。私は 2009 年の 8 月にペンシルベニア州のスクラントン大学でのプログラムを開始しました。それ以前は日本の大学院でアメリカ文学を研究していたのですが、アメリカに行ったことはありませんでした。しかし、研究を続ける上でアメリカ文化を実際に体験すること、そして英語力を向上させることの必要性を強く感じ、このプログラムへの参加を決めました。実際にアメリカに来て TA としての勤務を始めるまでは、希望と同時に大きな不安も感じていました。しかし日本、そしてアメリカでのオリエンテーションを通して、このプログラムの概要を知ることが出来たので、「なんとか頑張れるのではないか」そのように感じていました。ところが実際にプログラムが始まると、自身の希望や不安などに考えを巡らせている余裕もないほどに忙しい生活が待っていました。私のスクラントン大学での日本語 TA としての仕事は、初級、中級、上級の 3 コースを教えることです。大学に私しか日本語教師がいないため、セメスターを通しての授業計画、それをもとにしたシラバス作成、そしてもちろん授業、また採点、成績をつけることなど、すべてを一人で行いました。日本語教師の経験もなく、また大学で教えるということの責任の重さを感じ、一回一回の授業をこなすためにたくさん悩んで、たくさん緊張して、もちろんたくさん働きました。ちなみに、スクラントン大学の語学の授業は週に 3 回あり、また FLTA として第二言語教授に関する授業を 2 クラス受講していたため、休む暇もあまりありません。しかし、忙しいということが楽しくないということを決して意味はしません。そう感じ始めたのは、だんだんと秋が近づいてきた 10 月のはじめだったと思います。その理由のひとつとして、学生は予想以上に成長します。本当に驚くくらいに。正直に言うと、日本語を一切学んだことがないアメリカの学生が、日本語を話せるようになるのかということに関して、はじめは疑いがありました。もっと正直に言うと、それならばそこまで忙しく準備をして授業をする必要もないのではないかと、思ったこともありました。しかし、その疑いは、ひとつき経つころにはすべて消えました。なぜなら、繰り返しますが、学生は予想以上に成長するからです。同じ学部の教授に掛けられた言葉があるのですが、それは “Don't underestimate



your students!” です。彼の言ったことは正しい、そう実感した後は、もっとしっかりと教えたいと思い、「忙しい」というよりも「楽しい」が、私の生活を形容する言葉に置き換わりました。そして二ヶ月がすぎ、ワシントン DC での研修を経て、長い冬休みが終わり、また新しいセメスターが始まりました。いまは前セメスターよりもっと楽しいことが待っていると期待しています。今セメスターでは、本来の自分の専門である文学の授業も二つ受講しています。計 17 冊の本を読むことになります。日本語の授業も、引き続き担当しています。もちろん大変かもしれませんが、学生をそう信じるのと同様に、自分自身も “underestimate” しないこと、もしかしたらそれが FLTA として充実した生活を送ることの鍵かもしれません。今年度の FLTA に参加される方への私個人のアドバイスとして、どうせやるのだから時には無理してもベストを尽くして頑張ってください、そうすれば大変でも楽しく生活を送れます、ということを言いたいです。最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださったフルブライトプログラムおよび日米教育委員会に、本当に感謝します。のこりの 3 ヶ月を精一杯頑張りたいと思います。

最終レポート

5月26日、私はスクラントンから日本へ向けての帰途につきました。早朝のスクラントン-ウィルクスベア空港で、友人に見送られて、たくさんの荷物を持ち、私は空港の出発ゲートへと向かいました。それはとても長く感じられた FLTA としての 9 ヶ月が終わる瞬間でもありました。

昨年の8月に渡米し、日本語 FLTA としてスクラントンの空港に降り立った時、私には胸に決めたことがありました。それは FLTA 最後の日に胸を張ってこの空港に戻ってくること。そしてその時点と少しでも、いえ、かなり成長した自分自身であること。そのためにこれからの9ヶ月間で、できるすべての努力を積み上げることでした。もちろんその後、私のその時点での想像を超えることがたくさん起こりました。それは私にとって決して楽な9ヶ月間ではありませんでした。でも、確実なのは、その FLTA 最後の日に、私の胸は充実感であふれていたことです。その充実感は、私が FLTA 最初の日に決めた目標を達成したことから来ていると思います。

具体的に、私はどのようにしてそれらの目標を達成しようと努めたのでしょうか。日本に帰ってきて体験記を書くというこの機会に、それを考えてみることにしました。まず一つ目に、私は常に自分自身を「開いて」おこうと努めました。私は自分自身を「開く」という行為を、あらゆる状況や経験に臆することなく向き合うというイメージで捉えていました。例えば、日本語の授業の教室では、前もって想定できないことがたくさん起こります。スクラントン大学で日本語を学ぶ学生は、日本文化にとっても大きな関心を持っています。彼らが私にする質問には、すぐには答えられないようなものもたくさんありました。それらは日本の伝統文化に深く関わるものから、日本で流行しているアニメについてのものなど様々でした。また、日本語自体に関しても、私がこれまでにいかに日本語文法に無自覚であったかと思い知るほど、答えるのに難しい質問がありました。でも、それはひとつには、自分自身の文化および言語について新たな側面を知るよい機会です。私は答えるのが難しい質問には、きちんと調べて答えるようにしました。そしてそれはまた、アメリカ人の学生が日本文化をどのようなものとして理解しているのかを知る機会でもあります。全ての、自分にとっての新しい出来事に自分自身を「開く」ことによって、それらの機会を楽しみ、そこから多くを学ぶことができると思います。

同じことは、アメリカ人と付き合う上でも重要だと思います。FLTA としてアメリカの大学に赴任することは、語学の教師であることや学生であることを越えて、まずはひとりの人間としてアメリカにいる人々と交流することです。私は日本とアメリカの文化差を、人間関係においてもっと強く実感しました。そしてその分いっそう、アメリカで出会った人々を個人的によりよく知りたいと強く思いました。自分が慣れた文化とは違う文化を持った人々と深い人間関係を築くためには、ひとりの人間として彼らと話すのが一番です。英語の上手下手は第一の問題ではありません。まずは、自分自身を「開いて」みるのが大事だと思います。

次に私が努めたこととしては、常に全ての機会を自分の成長のために利用しようとしたことがあります。特に、アメリカで FLTA として働くということは大変なことがたくさんあります。

まず第一に、それはとても忙しい仕事です。以前の体験記にも書きましたが、週三回の語学のコースを3つ担当した私のスケジュールはとても忙しいものでした。しかし同時に、私の授業を受講する学生のことを考えると、絶対に忙しいという理由で授業に向けての準備を怠ることはしたくありませんでした。そしてまた、アメリカの大学で母国語を教えるということは誰もがができるわけではないとても素晴らしい経験です。そのような経験を忙しいという理由で逃す手はありません。というのも、正直に言って、アメリカの大学での外国語の授業の質は、日本の大学でのそれと比べて、非常に高いものでありました。なにより、日本語をはじめとする外国語を受講する学生たちの熟達度がそれを物語っていました。そのような場所で、語学を教えるということは、語学教育自体について深く学び考え、よりよい語学教育を達成することを目標に工夫を重ねる実践の機会です。私自身、日本で経験してきた英語の授業の悪い点を改善しつつ、また良い点をいかしつつ、アメリカでの授業にたくさんの先進的な観点を取り入れるよう努力しました。準備が大変な分、学生たちの成長が目に見えた時の喜びはひとしおです。そしてそれが自分のためにもなっているのだと実感されました。FLTA としての仕事を通しての大変さは、全てが自分の成長に役立つはずですが、

ところで、私の FLTA としての仕事は終わりましたが、アメリカで築いた人間関係はまた続いています。先日、スクラントンから私の親友が日本へ観光に来ました。彼女にとって、私が案内する日本の全てが新しく、とても楽しい旅になったようでした。そして、今年の九月には私の学生のうち二人が東京の大学に一年間の語学留学へと来ます。彼らはまた、私にとってのアメリカ文化と英語の先生でもありました。今度は、私をもっとたくさんの日本文化と日本語を教えてあげようと考えています。

FLTA プログラムは、基本的には、アメリカの大学で日本語を教える、あるいは日本語の授業のアシスタントをするとともに、アメリカ文化とその言語についての理解を深め、また自身の英語教授にそれを生かすことを目的とするプログラムだと思います。しかし同時に、このプログラムにはもっとたくさんの側面があります。語学教師/学生としてのみでなく、ひとりの人間として自分だけの目標を設定して参加し、それを達成するために努力することを可能にするプログラムです。私はこのプログラムに参加して本当によかった。これからもたくさんの日本語 FLTA がたくさんの目標を持って、アメリカに行くことを願います。そしてそれが各 FLTA 個人の、そして世界全体の、明るい未来へとつながればよいと思います。最後に、私にこのような素晴らしい機会を与えてくださった日米教育委員会および IIE フルブライトプログラムに感謝したいと思います。ありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2009 年度 参加者レポート

碓川 友規 --- Carleton College

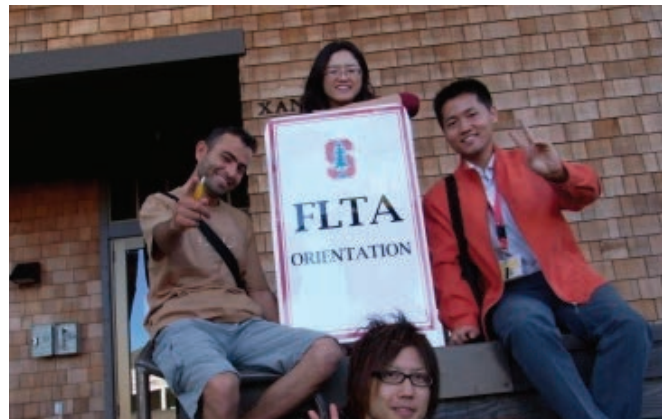
中間レポート

私は昨年9月からミネソタのノースフィールドにあるカールトン大学で日本語の補佐として働いています。カールトンでの私の仕事は

- 1、オフィスパワー (週5時間)
 - 2、ランチテーブル (週1時間)
 - 3、映画の時間 (週2時間)
 - 4、お茶の時間 (週1時間)
 - 5、ラジオの時間 (週1時間)
- +
- 6、先生の授業の補佐
- です。

オフィスパワーでは授業についての質問や日本語で会話をしたい学生などが来るので学生のニーズに応じて仕事をします。ランチテーブルは学生とお昼ご飯を一緒に食べる時間です。日本人の先生も一緒に参加することがありますが、来ない日もあるのでその時は一人で10人以上の学生と会話をするので意外に大変だと思います。映画の時間はその名のとおり学生と映画を見る時間です。学生の多くはアニメが好きなので日本からオススメのDVDなどを持参するのもいいと思います。図書館でDVDを借りることができますが、学生の多くがすでに持っているものも多く毎週DVDを選ぶのには苦勞しています。お茶の時間もその名のとおり学生と日本茶と日本のお菓子を食べたりして過ごす時間です。日本のおもちゃを見せることもあるのですがお茶の時間に来る学生は純粋に日本語を話したい学生が多いので私は会話を重視しています。ラジオの時間は私が実際にDJになり日本語を話します。初めは学生とラジオを聴く時間だと思っていたので、自分がDJになると知ったときは本当に驚きました。KRLXと検索するとラジオのホームページを見ることができ、実際にラジオを聴いたりすることもできます。

先生の授業の補佐についてですが、担当の先生によって仕事内容が変わります。私の場合は秋学期と冬学期で担当の先生が違うので仕事内容も違います。秋学期は、授業にアシスタントとして参加することとワークブックのチェックが主な仕事でした。冬学期は、金曜日の授業を担当することとCAN8というソフトを使って学生が吹き込んだ日本語をチェックしコメ



ントをすることと会話のテストをしてそれを評価することが主な仕事です。会話のテストは、私がお題を決め30点満点で評価します。学生の成績を左右するのでスコアを決めるときは毎回緊張します。

1学期に一度、日本食を作って学生に振舞います。これも大事な仕事の一つです。これまで私はカレーとお好み焼きを作りました。アメリカでは手に入りにくい材料も多くあるので早めに準備することが鉄則です。

カールトンは3学期制の大学で、私は1学期に一つ授業を履修しなければなりません。カールトンの宿題は他の大学に比べてとても大変だと学生に言われました。どこの大学と比べているのかは謎ですが、実際授業を受けてみての感想は本当に宿題が大変だということです。LAの仕事と授業の両立がとても大変ですがどちらもとても大切なことなのでタイムマネジメントにはとても気を遣っています。授業を決める前に学生に相談するのもいい方法だと思います。

秋の終わりに偶然近くの高校の先生と知り合う機会があり、授業を見学できるかどうかを交渉したところ月に一度という条件で見学できることになり、今現在で2回、授業を見学させていただきました。実際にアメリカの高校に行き、アメリカの高校生と接し、アメリカの授業を見学できるという貴重な体験をさせていただいたのでその先生にはとても感謝しています。カールトンのACTという活動の中に小中学生と交流するというものもあるので、興味があれば早めに調べておくことをオススメします。カールトンのホームページでACTと検索すると見ることが出来ます。

カールトンの学生は勉強が大好きなので毎日とても良い刺激を受けています。今、毎日宿題がたくさんあるので大変なのですが、毎日私よりも勉強している学生の姿を見て励まされ頑張っています。学生から学ぶことがたくさんあり、日々充実しています。このような機会を与えていただけたこと、また日米教育委員会の皆様のサポートに本当に感謝しています。あと残り4ヶ月、悔いのないよう一日一日を大切に過ごしたいと思います。

最終レポート

私は2009年度のフルブライトのFLTA (Foreign Language Teaching Assistant) プログラムに参加し、アメリカの名門大学の一つであるカールトン大学で語学アシスタントとして働き、且つ、学生と同じように授業も履修した。

英語力がアメリカに住むうえで大きな問題になることは容易に予想できた。渡米直後、私は全くといっていいほど現地の人々と意思疎通ができず辛い経験をした。この困難に直面することにより私は心を折ることなくまず意思疎通が取れるようになるために何かをしようと考えた。アメリカ人と話すのはもちろんのこと様々な国の人も積極的に話すよう心がけた。仕事上では、学生に日本の文化を紹介し、積極的に生徒と関わろうとした。お茶の時間や昼食の時間に彼らと日本の文化について話し、映画の時間では日本の映画を紹介した。日本の文化が私と学生との人間関係の架け橋になっており、改めて日本文化の影響を知った。仕事中は日本語を話し、仕事外では積極的に英語を話すよう心がけた。この試みが意思疎通をとるうえでの英語力を飛躍的に伸ばした。しかし、意思疎通をとるための英語だけでは不十分であり、英語は何かを学ぶためのツールであることに気がついた。その後、私はできる限り英語で物事を考え、学生と意見を共有すべく英語を話した。授業後は時間が許す限り授業の質問などをするために教授のオフィスアワーに赴いた。その試みが授業の理解を助け、様々な物事に対する考え方に影響を与えた。視野が広がり物事を注意深く、且つ、柔軟に考えるようになった。このことが将来の計画を見据えたり、目的を持って勉学に励むうえでの大きなステップとなった。アメリカにある様々なアイデアや民族性が私に違った角度から物事を考えさせた。この一年間の経験が私の考え方を大きく変え、且つ、将来に対する考え方にも影響を与えた。

しかし、考え方が大きく変わったということは、以前持っていた考え方を失ったことを意味する。得るものがあれば失うものも必ずある。私は高校教師を目指し、このプログラムに参加した。だが帰国後、私は再度アメリカに渡り教育を学びたいと考えるようになった。高校教師という安定した人生ではなく、大学教員になるという道を選択したいと考えるように

なった。それは「失った」のではなく「変化」だという人もいるだろう。私自身もそう考え、視野が広がったと心から思っている。だが、客観的に見ると、何か失ったものがあるのではないかと否定的に捉えてしまう。「井の中の蛙大海を知らず、されど空の青さを知る」という諺がある。私はアメリカへ行き、多くのものを見、多くのことを学び、知らない世界を多く知ることによって今まで感じていたものの良さを感じることができなくなってしまったのかもしれない。今現在はこのことを良い「変化」として捉えているが、この先その考えを持ち続けられるかどうかは私にかかっている。努力を怠ることなく前に進むことで本当の意味でこの「変化」が私の人生にとって有益なものであったと言えるのである。さもなければこの「変化」が否定的な意味になり、結果、「失った」という言葉に変わり後悔することになるだろう。

人生という道を歩む中で、幾度となく分岐点に辿り着き、選択を迫られることは人生の常であろう。どの道が正しいかなどわからない状況下、限られた時間の中で選択を迫られる。助言を求めるのは自由だが、最後に決断するのは自分自身。私はこの「変化」の中で見つけた新しい選択肢を選び、その道を突き進むことになる。不安はあるが後悔はない。人生とは何なのであろうか。私がこのプログラムで得たものをプラスにすべく、努力を怠らず自分の選択した道に自信を持ち前進したい。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった日米教育委員会にはとても感謝している。私は今まで長期的な意味での将来像を見据えたことはなかったが、このプログラムの中で長期的に自分の人生を見据えることができるようになった。このことは私の人生にとって非常にプラスであり、且つ、教育者として生きていく上でも重要である。この経験を生かし人生を豊かにすると共に、生徒たちに良い影響を与えられるような教育者になりたい。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2009年度 参加者レポート

佐藤 文 --- Wittenberg University

中間レポート

去年の今頃、まさか自分がこんなに充実した生活を送っているだなんて思いもしなかった。

こんなに驚くほどに楽しい時間があるだなんて。

私のいるウィッテンバーグ大学は、オハイオ州の小さな田舎町にたずむ2000人規模の大学だ。初めて来たときにはショックを受けた。まわりには草原以外何もない場所だったからだ。しかし驚いたことに、日本語を勉強している学生が大勢いる。しかも、勉強して2年にも満たない学生が、日本語を流暢に話す。私の話すことに興味を持ち、理解する。1時間、週3日という授業数にもかかわらず、彼らはテキストに加えてオンライン教材をつかった宿題でスピーキングやリスニングを鍛えている。ランゲッジセンターでは、必ず日本語で話さなければならない。大変だが、「日本語が話せてうれしくてしかたがない」と言う。そんな彼らとともにいる時間を増やしたくて、オフィスアワーには必ずランゲッジセンターにいるようにしている。その他、大学内では学習の遅れている生徒の手助けをしたり、和食パーティー、映画会、会話テーブルなどをひらいたりしている。学外では、文化交流フェスティバルや、地域の小学校で日本語や昔の遊びを伝えたりしている。英語力に自信がもてず、授業と仕事とをかけもちする大変だったが、それも徐々に慣れ、今はどちらも楽しくてしかたがない。時間がたつのは早く、プログラムもすでに後半をむかえた。

アメリカにいる、400人のFLTAたちが、みな、同じように充実した気持ちで日々を送っているだろうと思うと、胸がいっぱいになる。彼らは友達だから。フルブライトプログラムのおかげで、今こうして充実した時間がすごせていることをとても感謝している。

39カ国から集まった400数名のFLTAが、アメリカ国内の100以上の大学で、母国の文化を伝えるために、教鞭をふるうこのFLTAプログラム。中国語、スペイン語、ドイツ語などのように、人気のある言語だけではない。スワヒリ語、グルジア語などのように、学習者の少ない言語も含まれる。中には、ヨルバ語のように、聞いたこともないような言葉もある。FLTAプログラムの参加者である私たちは、通常FLTAと呼ばれている。アメリカでは、大学でのティーチングアシスタントとして、そして、学生としてのダブルアイデンティティが与えられている。



FLTAに合格したときは、不安でいっぱいだった。本当に、アメリカで生活できるのだろうか。

どんな大学に行くのだろうか。英語も大して話せないのに、文化を教えるだなんて大役、私につとまるのだろうか。他のFLTAの方とはうまくやっていけるだろうか。そんな不安は、誰もがもっているものだ気づいたのは、合格して間もない頃だった。出発の数ヶ月前から、送られてくるメールのタイトルは、"BEFORE YOU GO, YOU SHOULD KNOW." アメリカで生活するにあたって大切なことがぎっしりと書かれてあった。文化について、不安や期待について、食べ物、乗り物、教育制度・・・知っておくべきことが毎週送られてきた。このプログラムのスタッフの方々は、こんなに細かいことまでケアしてくれるのだと安心した。アメリカについてからも、そのメールは続いた。生活費の工面から、ハウスメイトとうまくやっていくためのコツまで書かれてあった。渡米前には、他のメンバーとも対面できた。去年の経験者からの体験談も聞かせていただいた。少しずつ不安が期待に変わっていった。私は、とてもラッキーだったと思う。まず、2国からきたFLTAと一緒に一軒家に暮らしているが、日々のコミュニケーションを通して、彼らの国際人としての魅力に大きく影響を受けている。彼らは、FLTAとして母国の文化を伝えることについて誇りをもっている。情熱的で、ポジティブで、そしていつでも誰にでも、心をオープンで、何事に対しても興味をもっている。Tatianaはロシアで社会人に英語を教えている。Maryは上海の大学教師だ。どんなに困難なことがおこっても、ともに解決案を考え、ともに乗り越えていった。帰国したら、また一緒に生活できる日がくるかどうかはわからない

い。でも、彼らがいるから、これまでは行こうとも思わなかったところに、行こうとしている。彼らの故郷へ。

フルブライトのFLTAプログラムは、私の人生にとって、有意義で、多大な影響をもたらしてくれた。

第一に、アメリカの若い人たちと、ほとんど年齢の変わらない人たちと文化を共有させてくれた。第二に、

大学教授などプロフェッショナルな方から教授法など技術や知識を学ぶことができた。第三に、世界中から集まった素晴らしい若者たちと出会う機会をいただいた。40カ国近くから来た人たちと、一緒に一つの部屋にいるだなんて、考えもしなかったことだ。あの瞬間、まぎれもなく、世界はひとつだった。歌にあるように、「世界は同じ。世界は小さい。」これは、本当だった。4泊5日で行われたワシントンDCでの研修では、400人近いFLTAたちに会い、教授法や文化など数々の研修を受け、意見を共有した。夜にはインターナショナルパフォーマンスも行われ、各国の民族衣装や歌や踊りを見ることができた。パーティーでは、パキスタンの子とイスラエルの子と一緒にダンスをしていた。ごく普通に、自然と手を取り、笑い合い、明け方まで踊り続けた。もしFLTAプログラムに出会わなかったら、別の現実の世界で、毎日、戦争をしている敵国の者同士がこうして、笑い合い、喜び合うことができるとは知るよしもなかっただろう。そして、それが、こんなにも簡単だと感じることはできなかっただろう。日本で教員をしている時は、自分の仕事がささいなことに思えることもあった。準備に時間がかかるし、雑用も多い。しかし、世界はつながれると伝えることのできる素晴らしい職業なのだと思えて気がさせていただいた。一人の人間として、これからも積極的に世界とつながっていききたい。そして、国境を越えて挑戦していく人たちを支えていききたい。FLTAプログラムは私の世界を大きく変えてくれ、世界とかかわる喜びと勇気を与えてくれた。アメリカ生活に慣れない若者を年間支えていくことは、さぞ骨折ることだと思う。それでも、このプログラムを継続し、困難にもかかわらず挑戦し続けるFLTAプログラムのスタッフの方々に、感謝をしてもしきれない。私はFLTAとして、本当に幸せだ。できることならもう1年やってみたいと思ってやまないのだ。

最終レポート

私の派遣された Wittenberg University というリベラルアーツの大学は、オハイオ州に位置する 2000 人規模のこぢんまりとした大学です。学費は1年間約 50000 ドルと高額ですが、1 クラス 15 名ほどの少人数クラスが多いことと、ライティングセンターやコミュニケーションセンターなど学生をサポートする体制が充実していることから、全米から学生が集まってき

ています。春から秋にかけては穏やかで過ごしやすい気候です。しかし、冬は長く、何週間もの間太陽は見え、大地は雪に覆われている状態です。気温も -20 ~ 30 度の日が何日も続きます。ダイヤモンドダストと呼ばれる空気中に浮かぶ微粒の氷が見られるほどです。

慣れない環境の中で、特別なお役目をいただき、英語の聞き取りさえもおぼつかず、てんてこ舞いなのに、いつも気のきいたジョークで場を和ませてくれる JoAnn、どんな時もふわっと明るい Jinny、夜遅くまでキャンパスに残り仕事をしていた今井先生、にこにこ笑顔で絶やさないうー先生、この4人のおかげで私はとてもおのびのびと仕事をさせてもらえました。

主な仕事は、日本語学科の授業の補佐、日本語検定対策のための授業、チューター、オフィスアワー、日本語を話すためのサークル活動、地域とのコミュニティ活動、学内外の文化交流イベントの企画や発表、イベント用資料作成、そのほか、小学校へ出張授業、映画鑑賞などに関わりました。これらの週 18 時間にわたる仕事のほかに、アメリカ文化に関する授業を各学期 2 コマ受講します。

日本語の授業では、学生の語学力の高さに驚きました。日本で受ける英語の授業と大分違うことに衝撃を受けました。文法説明に割かれる時間がきわめて少ないと感じたからです。授業中は、教科書の基本フレーズを確認したあと、さまざまなシチュエーションを想定しスピーキングを徹底的に行います。次に、ペアワークやグループワークを重ね、自然と口から出るようになります。その日の新しい文法や言葉をいかに多く使うかが重要視されているようでした。学生たちは、授業のための予習をほとんど欠かさずに行っており、驚くほどにまじめで、意欲的に取り組んでいました。

そんな学生たちの姿を見て、私も励まされました。日本人がめずらしいとされる地域だったので、日本文化を伝えようとさまざまなイベントの企画に携わりました。

近隣地域でのインターナショナルフェスティバルでは、子供たちを対象に、日本の昔の遊びを伝えました。日本から蝶の卵を輸送し、現地で孵化させるというバタフライショーでは、蝶にまつわるお話を劇にしました。琴の得意な学生が「桜」を演奏し、最後は「上を向いて歩こう」を合唱しました。通行人の方も立ち止まり、衣装(着物)を眺め、歌に合わせて手拍子してくれ大いに盛り上げてくれました。

学園内では、学部の記念イベントも1、2か月に1回のペースでありました。外国語学部による5ヶ国語で詠む詩の朗読ショー、ハロウィンに合わせて世界のゴーストストーリーショー、学部の40周年記念パーティー、世界のファッションショー、お月見や旧正月のお祭りなど。その都度、日本の文学や歌や踊りを調べることになり、私自身、改めて日本の文化の面白さを再確認させてもらいました。

自分にできることがわからず落ち込みそうになることもありま
した。しかし、その都度、学生たちが前向きに調べアイデア
を聞いてきたり、頼ってきてくれたりして、本当にたくさんの
学生たちの愛情を感じることができました。むずかしいことも、
何とかなるように思えてきました。企画や劇や歌の練習、演
出など、忙しい中でも手を抜かずやっているところを見ると、
相当なやる気を感じました。持ち前の勤勉さやまじめさで、本
番も、全員が発表をピシッとまとめていました。しかも、笑
顔を絶やさず楽しみながら。一連のイベントを通じて、ゼロ
からでもなんでもできることを学びました。あきらめなければ、
アイデアが目標に達し、形となること、夢や目標を形にする
ためには、周りの支えや理解が必要なのだということ、そして、
自分の意見を持ち、自分のできることは何かを考え、持ち味
を生かしてこわがらずに言うこと、やってみることが大切
なのだ改めて感じました。なにより、ものすごく貴重な経
験、財産をえることができました。この貴重な経験を、たく
さんの素敵な出会いを与えてくれたすばらしい仲間たち、そし
てフルブライト事務局の皆さまに心から御礼申し上げます。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2009 年度 参加者レポート

佐藤 友美 --- Colorado College

中間レポート

Colorado College, FLTA 2009-2010 佐藤友美 (さとうゆみ) 2009 年 12 月 18 日

こんにちは。私はアメリカ西部、コロラド州、コロラドスプリングスにある私立リベラルアーツのカレッジ、コロラド・カレッジで 2009 年 9 月より日本人 TA としてアシスタントをしています。コロラドスプリングスは州内で 2 番目に大きい街ですが、標高約 1800m、ロッキー山脈の東にある Pikes Peak という山のふもとに位置し、静かで緑の多い所です。日本の山梨県富士吉田市と姉妹都市交流があり、2012 年に 50 周年を迎えます。学生は約 2000 人おり、ブロックプランという、アメリカ国内でも 3 校が採用している珍しい学期制を実施しています。ここでは秋・春の二学期が、それぞれさらに 4 つのブロックに別れていて、学生は 1 ブロックに 1-2 講座の授業を毎日 3.5 週間に渡って勉強します。課題も多く進度も速いので大変ですが、興味に応じ自由に選考を組むことができ、集中して学問を学ぶことができます。多くの生徒は多い子で 5 つ等、複数の課外活動に参加しており、とても積極的、クリエイティブに勉学と課外活動を両立しています。

私は学内で CPC (Cultural Program Coordinator) というお役をいただき、授業のアシスタントと日本文化を紹介するイベントの企画をしています。学内にはアラビア語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ロシア語の CPC と中国語のチューターがいて、ほぼ全員がそれぞれ学内にある各 Language House にその国の文化に興味のある学生と生活を共にしています。私は秋学期は日本語クラス初級・上級と、adjunct と呼ばれる会話スキルを磨くための授業に参加し、放課後にチューターをさせていただきました。私の役割は、生徒の日本語のインプット量を増やして会話の練習相手となること、文化についてのちょっとした紹介、課題の添削などです。日本語を教えている教授は 2 人いて、一人はアメリカ人、一人は日系人ですが、お二人とも博識、特有のバックグラウンドを持ち、学内外において活躍されています。授業に参加させていただき、日本文化についての繊細な面、アメリカ人から見た日本文化、文法の教え方、学習方針等、日々勉強させていただいています。初級クラスの生徒は好奇心が強く、とてもユニークなメンバーのクラスです。上級クラスは少人数で



すがモチベーションが高く、まじめに勉強し、学期末には日本の学生にコロラド・カレッジを紹介する i-movie を作成しました。

イベントはブロックごとに、食卓を囲んでの Language Table、日本食と文化に親しむ Cultural Dinner Night、その他 Movie Night やゲストとのディスカッション等を企画しています。面白かったのは巻き寿司を生徒が作ったことや、日本のお正月についての 3 択クイズ、テキスト「げんき I・II」の単語を使った絵カルタゲーム等です。始めはスムーズにいかず、実施するのに何しよう、どのようにしたらよいのだろうか、で精一杯でした。でも徐々にどうしたらもっと生徒が日本の文化に触れて、日本語を使う機会を増やせるか、と考えるようになりました。Asia House 内の生徒もグループで毎月文化企画の担当をしています。中には専攻がアジア研究であったり、インドの高校で育った子、アジア諸国を旅していた子もいて、日中以外のアジアの文化色をもたらしてくれます。学外では、教授の先生の紹介で地元の日米協会のイベントー日本バザー等でお手伝いさせてもらう機会もいただきました。日米協会はメンバーもバザーのお客さんもアメリカ人のほうが多いのですが、どれだけ沢山の方が日本について興味を持ち、知っているのかということに驚かされます。

9 月より 12 月の間、前半はとにかく周囲の環境や、生徒とどのように接したらよいか、求められる役割は何なのか、そして勉強のための自分の授業に慣れるのに精一杯だったように思います。そのためにイベントもやっものもの、そして進め方もごちないものだったのではと思います。そのような中で、お手伝いをしてくれる生徒や、協力して下さる先生方、知人の方がいたことは大変有難かったです。最近ようやくもっ

と周りを見て過ごせるようになりましたが、日本語のクラスではフォローが足りず、イベント企画でも生徒の本当にやりたいことよりも主観が強かったのではないかと反省です。大学の要求と、自分の考えと、生徒の興味関心とを上手に組み合わせた企画をすることが難しいことだと思います。一人ですることには限界があり、担当の先生、日本人の知り合いの方、日本人留学生にとっても助けられています。また、行き詰っているときには、他のCPCの主催しているイベントに参加し、先輩に学ばせていただきました。

今でも果たしてこれは生徒のためになっているのだろうか、大事なことをミスしていてもっと他に出来ることが何かあるのではないかと悩みます。後半のハウスでの課題は例えばフランス、ロシア語のハウスのように、もっと日本語で会話する割合を増やすこと、様々な文化面を紹介すること、生徒の希望をヒアリングして企画を立てていくこと、ハウス内が家族のような雰囲気になるように努力することかなと思います。学内では毎日多数のイベントが開催されていますが、そのような場にももっと出て行き視野を広げたいと思います。あつという間に折り返し地点となりました。まだまだ足りないところが多々あります。でも学内に支えてくれる先生や友達がいる、そして同じアメリカ国内で、日本人を始めすてきなFLTAの仲間も頑張っています。ここでの1年間、後から振り返って、生徒が日本について新しい発見や体験をしてもらえよう、そしてみんな楽しんでね、といえるような一年となるように頑張っていきたいと思います。

最終レポート

フルブライトFLTAプログラムを通し、私が米国のコロラドカレッジで過ごさせていただいた9ヶ月間は、得がたく忘れがたい一生の宝物です。大学でアメリカ文化と第二言語教育を学んだ私は卒業後、私立高校で英語講師として働いていました。このプログラムを知ったときは自分の思い描いていた理想とぴったりフィットし、抱いていた夢を叶えてくれる、願ってもいない留学の機会であると思いました。しかし一方では、時期的なことや現状の自分に果たせるだろうか等の不安に悩みました。そのような中周囲の方のご理解と支援をいただけたことは感謝であり、そしてやはり英語教員として、アメリカの大学教育の現場から語学教授スキルを吸収し、実際の海外体験をもって語学の背景にある異文化を伝えられるようになりたいと思いチャレンジしました。同時に日本語と文化を伝えることで、幼少時に育てていただいた米国の方々に恩返しができるだけでもできたら…。気候、風土、仕事内容など未知なる環境への不安はありましたが、研修のサポートと現地の方の温かさのおかげでそれは杞憂に終わりました。本当に多くのすばらしい人々との出会いに恵まれ、公私共に様々な価値観を



得ることができました。失敗や喜びもすべて自分を成長させてくれた体験であったと思います。現在は今回の経験をもとに語学教育の場・社会に還元し、異文化の人たちとふれあい、日本と諸外国の交流から得たものをさらに延ばし、将来はその土台になりたいと考えています。何物にも換えがたい貴重なチャンスを頂き、それを可能にしてくださったフルブライト、IIE、大学関係者、支えてくれた同僚、友人、生徒、そして応援してくれた家族に心より感謝御礼申し上げます。

大学の先生方はどなたも教授、研究者、文化の橋渡し役として情熱と指導力にあふれていました。そのような方々のもとで働くことは大変刺激となりました。「一人ひとりを伸ばしてあげたい。」との先生の嬉しそうな表情も忘れられません。日本語クラスの補佐では初級～上級クラスに入らせていただき、その日に学んだ内容その日のうちに使う集中かつ実践的授業スタイルで、ブロックシステムのもと1ヶ月、2ヶ月という短期間で生徒の日本語力が上達する姿を目の当たりにしました。音声・メディア学習ツールの使用や自作動画作りなど課題の工夫も目からうろこでした。授業の合間や放課後に行った個別指導では、文化の違いの差やわかりづらい文法項目が見えました。また、会話、文法、漢字など授業中には気がつかなかった生徒一人ひとりの弱点や強みがわかり、生徒にとっても教える側にとっても役立ったと思います。大学内に語学に興味がある学生向けに外国語の寮があるのも画期的な環境

でした。

文化行事の企画は毎月キャンパス寮で主催するものと、地元日米協会が大学と共同で開催するものがありました。日本語を学習している生徒もモチベーションは高く、情報化の時代、日本の事情をよく知っていました。会話では教わることのほうが多かったとも思います。なので私は毎月の担当行事を通し、日本の伝統行事や映画など生徒と共有したいものを紹介し、新たな側面や文化体験をしてもらいたいと思いました。料理ではカレーやお好み焼き、そしてお雑煮が人気でした。アクティビティーはテキストの単語を使ったジェスチャーゲーム、日本庭園の手入れ、お正月慣習クイズ、太巻き・ぼたもち作り、だるまさんが転んだ、折り紙、いけばな等を実施しました。楽しんでもらった時は本当にうれしかったし、伝えることを通して私自身も日本文化がより好きになりました。5月の子供の日のお祭りでは、書道や折り紙のワークショップに大学の生徒もお手伝いで参加しました。日本語を勉強したことのないメキシコ人の子や、浴衣を着た子もいて、自信をもって楽しそうに日本文化を子供たちに教えている姿に感動しました。ソーラン節の練習や発表も異文化交流の機会となりました。ある日練習の後、「ソーラン節の練習が終わってしまうのがいやだ。」といった子がいました。家ではCDで兄弟に教えたい、とも話していて、次はみんなが次の代の人に伝えていけるじゃない、と交わした会話も心に残っています。

聴講生としての授業は4つとりました。一番印象深かったのは、Teaching English as a Second Language という授業で、英語の教授法をテーマ別に学んだ後、授業指導案を発表するグループプレゼンテーションがありました。私たちの班のお題は、アフリカに派遣され、保健の授業で子供たちに英語を使ってマラリアの予防法を指導することでした。初めは優秀な生徒の言動や英語力とスピーチ慣れの差に気後れましたが、練習を重ねて迎えたプレゼンテーションではチームで和合が生まれ授業を通しての友達もできました。評価も好評でしたが、アフリカでは、今でも土地の知恵者とのつながりを大切にしている地域もあり、医師の診察の前に助言を求める場合もありうることを考慮しなければならないなど、どこまでも現場の文化を大切に、相手の目線で考えていかなければいけないことを痛感しました。また、公立小学校の移民クラスでの実習があったのですが、担任の先生は英語を教える以前に、子供たちの置かれている不安定な家族・社会環境をくみとり、ほかの教職員と連携をとりながら、トラブルに巻き込まれないよう精神的サポートに力を入れている姿が、教科指導の学校教育が当たり前と思っていた私にとって衝撃的でした。この授業を通し、語学教育といっても幅が広いことや、視野の狭さ、異文化理解の姿勢を教えてくださいました。

プライベートにおいても、同期の友人と雄大なグランド・キャニオンを訪れては、アメリカ先住民の時代に思いを馳せたり地球の歩みの長さを感じたり、帰国後に再び訪れたハワイで



は、メモリアルデーに併せてのハワイ燈籠流しの海岸で国境や宗教を越えての融和、平和への祈りの瞬間に、アメリカを肌で感じる機会となりました。

FLTA プログラムは、人材交流を通して世界平和へ貢献するというフルブライト奨学金設立の趣旨どおり、人と人との交流により異文化を理解し、様々な価値観を共有し、ともに母国のアイデンティティーをもちながらグローバル市民である意識を得て、個々人の可能性を広げるチャンスを与えるものだと思います。これからも、一人でも多くの英語教員志望者がこの留学の機会にめぐりあわれることを望みます。ありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2009 年度 参加者レポート

鈴木 健人 --- Casper College

中間レポート

私はワイオミング州カスパーにあるカスパーカレッジという、2年制のコミュニティカレッジで日本語のクラスを2つ担当しています。ワイオミング州はアメリカの北西部に位置し、世界最古の国立公園、イエローストーン国立公園がある州として知られ、カスパーは人口5万人ほどで、西部劇の面影を残すカウボーイの町として知られています。標高1500メートルのカスパーの西にはロッキー山脈が聳え、9月には雪が降りました。12月には氷点下20～30度に下がる日もあり、それに加えて強風が吹く乾燥した土地です。気候とは対照的にカスパーの人々は温かく、皆親切な人ばかりです。

カスパーカレッジは約4000人のフルタイムの学生を抱え、さらに12000人もの人々が生涯学習などで何らかのコースを受講している、コミュニティの中心的役割を担っているカレッジです。教育熱心な先生方と親切な職員、そしてカスパー在住であればわずか1700ドル程で1年の学費が賄えることが最大の魅力で、これにより多くの人々が高等教育を受ける機会を得ています。

カスパーカレッジで私は初級日本語の授業を2クラス担当しています。コミュニティカレッジは一般的に少数者教育を行っており、カスパーカレッジも例外ではなく、特に外国語のクラスでは受講者数を各クラス20名に制限しています。私のクラスは12名と16名が受講していて、夜のクラスには「デュアルエンrollment」と呼ばれるプログラムで受講している高校生から、仕事の後に学びに来る50代のソーシャルワーカーまで様々なバックグラウンドの人が日本語のクラスを受講しています。日本語という文字体系の全く異なる言語を学ぶということもあって、どの学生もとても意欲的に授業に取り組んでいます。

授業では挨拶、ひらがな、カタカナから始まり、今学期は「過去」の表現まで学びました。授業はペアやグループでの会話活動が中心で、与えられた課題に加えて、各々の学生が知っている表現を交えながら学んでいます。驚いたのは日本語を受講している学生が予想外に礼儀正しかったことでした。授業のあとに「ありがとうございました、せんせい。さようなら!」と多くの学生が言ってくれます。今やこのような光景は日本でもなかなか見られないのではないのでしょうか。

日本文化を伝える活動として、今学期は折り紙、書道、茶道



を行いました。特に茶道は学生たちだけでなくコミュニティの人々も招いて行い、60名を超える人々の参加がありました。比較的小さいこの町で、これだけ多くの人に日本文化に興味を持っていただいたことは非常に大きな喜びでした。一つの機会を一度きりの機会と考え、精一杯のもてなしをするという日本文化の重要な側面の一つを伝えることができたと思います。

こちらではESLの授業と「アメリカ文化入門」という授業を受講しています。受講者は皆留学生で、授業では当然アメリカの歴史や文化、アメリカ人の価値観、家族関係などを学びますが、それぞれの学生に求められるのはそれが自国の文化とどう違うかを説明できることです。アメリカ人観察やインタビューの課題に加え、突然の質問に備え、前もって日本の教育や政治システムについて英語で説明できるように準備しておくことも求められます。課題の量は多いですが、やりがいのある楽しい授業でした。

最初の学期が終わった後、ワシントンD.C.で各国からのFLTAが一堂に会してのカンファレンスがありました。数々のセッションを通じて自分たちの体験を語り合うこのカンファレ

ンスで、幸運にもプレゼンテーションをする機会をいただきました。私は漢字の成り立ちから学生にその意味を予想させることで、語彙を伸ばし、忘れにくくするという方法について発表しました。会場ではトルコ、ウズベキスタン、韓国、モンゴル、キルギス、そして日本というグループでしたが、漢字を使わない国のフルブライターも積極的にコメントや質問をしてくれました。発表前は漢字を使わない国のほうが圧倒的に多い中で私のプレゼンテーションがうまくいくかどうか不安でしたが、思った以上によいプレゼンテーションになりました。キャスパーカレッジでの日々は忙しくも充実した毎日で、あっという間に一日が過ぎてしまいます。日本語を学ぶ学生や同じ授業を受講している学生との出会いを大切に、次の学期も一日一日を大切に過ごしたいと思えます。このような素晴らしい機会を与えてくださったフルブライトジャパンの皆様、アメリカでの生活をサポートしてくださっている IIE の皆様、そして私を任命してくださったキャスパーカレッジといつも私を何かと助けてくれるキャスパーの皆様へ心より感謝を申し上げます。

最終レポート

FLTA プログラムのプライマリーティーチャーとして、私はアメリカ北西部、ワイオミング州キャスパーにあるキャスパーカレッジという二年制のコミュニティカレッジで日本語を教えました。人口五万人ほどのこの町は、西部劇の面影を残すカウボーイの町として知られています。西にはロッキー山脈が聳え、標高は1500メートルほどで、9月には雪が降るほど寒さの厳しいところでしたが、人々は温かく、皆親切でした。質の高い高等教育を幅広いバックグラウンドの人々に提供すると同時に、コミュニティの中心的役割を担うキャスパーカレッジで、私は数々のかけがえのない体験をしました。

私はキャスパーカレッジで各学期週4時間のクラスを2つずつ担当しました。秋学期はどちらも初級クラスで、春学期には初級クラスと中級クラスを教えました。初級クラスは12~18人が登録し、中級クラスは10人が登録しました。それほど大きくはない大学ながら、これほど多くの学生が日本語に興味を持っていたことに驚きました。私は日本語を教えた経験があったわけでもなく、初めは手探りでの授業でした。学生とのコミュニケーションを重視し、一步一步理解を確かめながら授業を進めました。どの学生も意欲的で、積極的に授業に参加し、たくさん質問をしてくれました。私が一番苦労したのは漢字を教えることでした。漢字の成り立ちを図示し、意味を推測させるという活動は効果的だったと思いますが、学生は何度も書いて覚えるということをしたがらず、定着までは至らなかったのが残念でした。しかし、コミュニケーション活動



はどの学生も積極的で、アニメや漫画で覚えた表現を使ったり、こちらが指示しなくても会話を発展させたりして練習していました。

受講したクラスはアメリカ文化入門のクラスと e ラーニング、そして教育心理学などでした。e ラーニングのクラスでは様々な専攻の学生が集まり、テクノロジーをそれぞれの教科の授業にどう活かすかを学びました。まず、どのような技術が利用可能かを学び、次に実際に教材を作ったり、指導案を書いたりしました。最後のプロジェクトでは私の日本語の授業を受講していた政治学専攻の学生とペアになり、ソフトパワーとは何かについて、日本のアニメーションや歴代アメリカ大統領の演説を例に用いて、高校生向けの模擬授業を行ないました。

教育心理学の授業はオンラインクラスでした。教室での授業は全くなく、Moodle というオープンソースの授業管理システムを使い、資料配布から質問、ディスカッション、レポート提出まですべてオンラインで行われる授業でした。毎週ひとつずつピックが示され、配布された資料やテキストを読み、Moodle 中に作成された掲示板を使ってディスカッションし、学んだことを応用してリサーチデザインや指導案作成などが課題として出されました。また課題の一つに Educational Tool を作るというものがああり、私は日本語の授業に使えるように手描きで「かるた」を作りました。

最初の学期が終わった後、ワシントン D.C. で各国から FLTA が集ってのカンファレンスがありました。様々なセッションや FLTA による発表などがありましたが、幸運にも私もプレゼンテーションをする機会を頂きました。発表では漢字を教える際に漢字の成り立ちから学生に漢字の意味を推測させ、語彙を増やす方法とその際の注意点について話しました。私たちのグループはトルコ、ウズベキスタン、韓国、モンゴル、キルギスからの FLTA と一緒に、大部分は漢字を使わない人々で

したが、皆真剣に私の発表に耳を傾けてくれ、たくさん質問もしてくれました。また5月にはワイオミング州すべての大学から大学職員が集まって研修を行うカンファレンスに招待され、留学生、そして外国人講師が直面する困難やカルチャーショックについて、自らの体験を基に発表しました。

授業外の活動としては、月に一回程度ゲストスピーカーとして心理学や政治学、宗教学、美術史などの授業に呼ばれ、日本の文化や日本人のパーソナルスペース、政治に対する姿勢、宗教観、日本の芸術作品についてスピーチを行ったり、学生からの質問に答えたりしました。

また私は日本で茶道を学んでいたこともあり、大学や地域の小学校でお茶を点てる機会がありました。大学で行ったときには、学生や教員、職員だけでなく、地域に住む多くの方々にお越しいただきました。生涯学習クラスで日本文化入門講座を担当した時も、実際に何か体験できるものということで、お茶を点てました。そして、小学校で美術を教えている先生から、授業で子供たちが茶わんを作ったのでぜひその茶わんを使ってお茶を点てて欲しいという願いをされ、小学校にも行きました。思い思いに彩られた小さな茶わんでお茶を点てたことは、きっと子供たちの心にずっと残ると思います。私が期待していたよりもお茶を点てる機会は多く、日本の伝統文化の魅力と、そこに見られる日本人の思考様式を伝えることができたと思います。

このプログラムでアメリカ人に日本語を教えてみて、日本語のクラスを通して普段意識しない日本語の文法や、アメリカ人を惹きつける日本文化の魅力を再発見しました。想像していた以上に日本語を教えることは難しいと感じましたが、キャンパス内で学生から日本語で話しかけられたりすると、日本語を教えた甲斐があったとうれしくなり、とてもやりがいのある仕事だと感じました。日本のことを知りたいと思う学生に日本語や日本文化を伝えられたことは、何にも代えがたい喜びでした。FLTA プログラムに参加することができ、本当によかったと思います。今後はアメリカでの一期一会の出会いとキャンパスで培った経験を生かし、自分の体験を語り、一人でも多くの学生を海外留学に送り出すことができる英語教員になりたいと思います。最後になりましたが、このプログラムを支えてくださったフルブライト事務局の皆様、IIEの皆様、そして苦労や悩み、喜びを共有した同期のFLTAの皆様に心より感謝を申し上げます。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2009 年度 参加者レポート

柳田 有紀 --- Lincoln University

中間レポート

私は8月8日から12日まで、ミシシッピ州にある Jackson State University で FLTA としての研修を受けた。そこでは世界中から50人の FLTA が参加し、FLTA としての基礎を学ぶとともに、国、政治、宗教、人種などあらゆる出身を超えて交流することができた。

研修後は、Pennsylvania にある Lincoln University での生活が始まった。Lincoln の特徴として挙げられるのが Historically Black University であるということだ。それ故、基本的に学生は African American で、様々な人種の人々が暮らすアメリカでとてもユニークな体験をしている。授業では私が唯一の日本人 instructor ということもあり、Lincoln では初級、中級、上級のクラスをすべて担当している。シラバス、コーススケジュール、成績管理など、どれも責任のある仕事で身が引きしまる日々である。また、授業のほかに日本語クラブの顧問も担当しており、学生たちと日本文化の交流を楽しんでいる。

さらに、Lincoln University では日本語を教えるとともに、Black Studies の講義も受けている。Lincoln University はアメリカで初めての Black University であり、Black Studies が誕生した場でもある。African American の歴史を学ぶことは、アメリカという国と自分の学生を理解することにも通ずるので、とても有益な時間を過ごさせてもらっている。

さて、ここで FLTA としての4カ月を振り返ってみる。渡米前、アメリカは私にとって決して珍しい国ではなかった。政治、経済、文化など日本とアメリカのつながりは毎日メディアを通して触れられていたからだ。しかし、このプログラムに参加していて感じることは「個と個」としての交流である。「国と国」の交流では得られないものがたくさんある。国、政治、宗教、人種など、様々な人と様々な違いやバックグラウンドを超えて、人は共有できるものがあることを教えてくれる。Lincoln University での生活が4カ月を過ぎても新しいことに遭遇し、新しい自分に出会う毎日。まだまだ消化しきれていない。この1年が終わっても消化しきれないかもしれない。しかし、それだけ中身の濃い充実した毎日を過ごしていることだけは言えるかもしれない。



最終レポート

2009年8月 Pennsylvania 州にある Lincoln University に Foreign Language Teaching Assistant (FLTA) として派遣された。Lincoln University は 1854年4月、Ashmun Institute として創立されたアメリカ合衆国初の歴史的黒人大学 (Historically Black Colleges and Universities、通称 HBCU) である。1866年、16代大統領 Abraham Lincoln の功績を称えて Lincoln University に改名された。Pennsylvania 州、Chester 郡の南部に位置し、現在の学生数は約 2000 人の総合大学である。

さて、Fulbright FLTA Program とは以下の通りである。

アメリカの大学で日本語を教えながら、

- 英語教授のスキルを高める
- 自身の英語能力を高める
- アメリカの文化や習慣についての知識を高める

まず初めに、私の FLTA としての仕事について言及したい。大学では Primary teacher として授業では、初級・中級・上級の3コースを担当し、シラバスの作成、授業計画、試験作成、成績管理、チュータリング、日本語クラブ顧問などを行った。Department of Foreign Languages and Literatures では日本語の Instructor は私のみのため、Department 全体の仕事はもちろんのこと、「日本語」に関わる全ての仕事を任された。

二点目の自身の英語能力を高めるという点についてだが、日本語の授業は主に Direct Method で行っており、私にとって日本語を話すほぼ唯一の機会であった。と言うの

は、Lincoln University が HBCU に属することもあり、日本人はおろかアジア人すらいない環境に身をおいていたからだ。また、アルゼンチン、コロンビア、チュニジア、フランスからの FLTA たちと共に生活しており、お互いの共通語である英語を住まいでも話さざるを得なかった。また、Lincoln University という環境から、キャンパスは Ebonics で溢れていた。それは、自分が机上で知っていた以上に標準英語と異なり、アメリカにおける英語の多様性にも触れられた。自身の英語力を測る手段として、滞在7ヶ月目に TOEFL を受験した。その結果、Speaking が目覚ましく進歩したのを知ることができた。

最後は、アメリカの文化や習慣についての知識を高めるという点についてである。FLTA はアメリカの大学で母語を教えるだけでなく、アメリカに関する知識を深める授業の受講が求められる。そこで私は、Black studies を2コマ受講した。Lincoln University は Black studies が誕生した地であり、その分野に精通した教授陣はもちろんのこと、学生たちも自分たちのアイデンティティである人種に対する意識は強く、ディスカッションは常に活気に満ちていた。Black studies の授業では、Africa の歴史、特に Nubia、Kemet、Kush の古代文明から学び、三角貿易の背景、南北戦争、アメリカ合衆国建国、公民権運動等を African American の視点から考察した。受講していた授業の中でとても興味深かったエピソードとして、「自分は African American ではなく、African だ」と主張する学生が少なからずいたことが挙げられる。ある学生に理由を尋ねてみると、「私の祖先はヨーロッパ人によってアフリカにある祖国から連れ去られ、富をなすために奴隷にさせられた。アフリカは自分の起源であるからだ」という答えが返ってきた。「自分はアメリカ人ではない」という意見に、自分が想像さえしなかったアメリカが見えた。HBCU である Lincoln University に派遣され、私は初めて自分がマイノリティであることを味わった。それ故に自分自身や自分の祖国について見えてくることも多かった。Lincoln University では African American の人々に囲まれ、日本人はおろかアジア人への接触も難しい地域であった。しかし、Lincoln University で過ごした日々は自分の中にあつたアメリカの既成概念を覆し、新たな角度からアメリカという国を見つめることができた。さらに、8月に行われた Summer Orientation や12月に Washington D. C. で行われた Mid-term Conference で知り合った世界各国の FLTA たちとの友情は、国や慣習や宗教など様々なバックグラウンドの違いを超えて、個と個として人々は理解しあい、協力し合っていることを身を以って体験できた。この10カ月間、Fulbright FLTA として経験し、学んだ全てのことは、私の一生の財産であると胸を張って言える。

